



a man with NO mission ①

1	犬を介した出会いについて	179字
2	頼まれごと	305字
3	自転車にのって	520字
4	鞆の行方	385字
5	サプライズ	620字
6	区廃-第1237号	354字
7	帰郷	270字
8	回廊	411字
9	撮影	704字
10	橋の上から	499字

犬を介した出会いについて

1 犬を介した出会いについて

ある男が公園で犬を連れた女と知り合った。

男は彼女を気に入り、彼女の犬のことも同じように気に入った。二人は連絡先を交換し、週末になると連れ立って犬の散歩をするようになった。二人が恋仲になるのに時間はかからなかった。

あるとき、男が犬を撫でながら「人が死ぬより犬が死ぬ方が悲しいよね」と言った。彼女は曖昧な微笑みを返した。

その日を境に彼女とは連絡がつかなくなった。

頼まれごと

2 頼まれごと

喫茶店のトイレで小用を足しているときのこと、男は卵ともやしとさつま揚げを買ってくるよう妻に頼まれていたことをふと思い出した。読書に夢中になっているうちにすっかり忘れてしまったのだ。

およそ二時間後、二軒目の喫茶店でトイレに入ったときのこと、男は妻に頼まれた買い物のことを今また思い出した。読書に集中しているうちにまたぞろ忘れてしまったのだ。

帰りに立ち寄ったスーパーで、男は頼まれたもののことをぼんやり考えながら売り場をうろついた。卵、もやし、さつま揚げ。男は頼まれたものとは別のものを買った。なぜそうしたのか自分でも分からなかった。

家に帰ると、男はこんな簡単な買い物もできないのかと言って妻にねちねちなじられた。

3 自転車にのって

ある男がバンドをやっている友人にライブに誘われた。ライブハウスがあるのは最寄り駅と同じ沿線のA駅だった。当日、男はライブハウスまで自転車で行った。電車で十五分のところを四十分かかった。「自転車で来たのかよ」男は友人に笑われた。

男は今度は大学の同期の飲み会に誘われた。場所は都心のB駅だった。男は自転車で行った。電車で一度乗り換えて三十分かからずに着くところを、一時間十五分かかった。同期たちは待ち合わせ場所に自転車で現れた男を不可解そうに見つめた。

飲み会の席で男は酒を断った。アルコールに極端に弱い体質だからだ。男はそれでも二次会まで参加し、弱々しい笑みを浮かべて隅に座っていた。会計は割り勘だった。

夏になると、男は職場のバーベキューに誘われた。場所は県境にある大きな川の河川敷だった。男はやはり自転車で行った。電車で二度乗り換えて五十分かかるところを、道に迷ったこともあって二時間以上かかった。「どうして自転車で来たんだ？」ある同僚が不思議そうに訊いた。男はうまく答えられなかった。

同僚たちがバーベキューを楽しんでいる間、男は堤防を越えたところにあるコンビニまで歩いて行って地図で道を調べた。帰りは一時間四十五分で帰ってくることができた。

4 鞆の行方

駆け込み乗車に失敗し、ドアに鞆を挟まれたまま電車が動き出してしまった。男は鞆を追ってホームを電車と並走したが、結局何もできなかった。

三つ先の駅では友人が男の到着をやきもきしながら待っていた。次の電車が入ってくると、その友人はドアに何か見覚えのあるものが挟まっているのを見つけた。すぐに男の鞆だと分かったが、当の男は乗っていなかった。友人は、男がドアに手を挟まれたまま電車に引きずられて死んだのだと思った。

男の葬儀が営まれた。男は遺失物取扱所と散々やりあったあとようやく鞆を取り戻すと、あわてて自らの葬儀に駆けつけた。参列者はいずれも顔見知りだった。男はこれは何かの間違いだと訴えたが、誰一人耳を貸してはくれなかった。

男は仕方なく片隅で式の進行を見守った。やがて耐えきれなくなってその場をあとにすると、家に帰ってショックで寝込んでしまった。鞆は葬儀場に忘れてきてしまった。

5 サプライズ

スカイダイビングを愛好するカップルがいた。結婚を決意した男は、サプライズが好きな恋人のためにフリーフォールの最中にプロポーズをすることにした。

高度3,500メートルの地点でセスナ機から飛び出した二人は、うつ伏せ体勢になって手を取り合い、時速200キロのスピードで空中を落下していった。

男がポケットからおもむろに指輪を取り出してみせると、恋人は歓喜の叫び声をあげた。男は身振り手振りで結婚を申し込んだ。恋人は目に涙を浮かべて繰り返しうなずいた。

男が恋人の左手の薬指に指輪をはめると、高度1,000メートルが近付いてきた。二人は口づけを交わし、見つめ合いながらパラシュートを開くのに安全な距離まで離れた。

開傘高度になり、二人は同時にハッキーを引っ張った。開いたのは男のパラシュートだけだった。気がついた男が顔を下に向けると、恋人がパラシュートを開こうと必死にもがいているのが見えた。ADD（自動開傘装置）も作動していないようだった。

そうなる成す術はなかった。男は恋人が豆粒のように小さくなっていき、地面に叩きつけられるのを見た。

男は恋人からかなり離れたところに着地した。しばらく身じろぎもできないでいたが、やがてよろよろ起き上がった。男は震える手でパラシュートを外すと、重い足取りで恋人に近づいていった。生死を確かめるまでもなかった。男は恋人の傍らに膝をつき、左手から指輪を回収した。

一年半後、男は新しくできた恋人にその指輪をプレゼントした。

6 区廃-第1237号

ある朝、男が仕事に向かっていると、真新しいごみ収集車が彼を追い越していった。男は青い車体に白い文字で区廃-第1237号とあるのを見た。

あっという間に十年が経った。男は仕事を二度変わり、住まいを一つ隣の駅に移していた。いまだ独り身だった。

ある朝、男は仕事に向かう途中の道でごみ収集車とすれ違った。ふと見ると、青い車体に白い文字で区廃-第1237号とあった。あのときの車だった。男はまだ真新しかったそのごみ収集車を見たときのことをよく覚えていた。

その日は一日仕事が手につかなかった。この十年というもの、男の生活にはそのごみ収集車のこと以外、記憶に残るようなものが何一つなかったのだ。男はどうしようもない虚しさに襲われた。

男は定時に仕事を上がると、まっすぐ家に帰り、カーテンレールで首を吊った。うまくいかなかった。

7 帰郷

親危篤と連絡があり、男は十数年ぶりに帰郷した。両親とは長らく疎遠になっていた。駅から実家までは歩いて三十分の道のりだった。田圃の間を抜けていくのだ。

炎天下を歩いていると、道端で何匹もの蛙が干からびて死んでいるのが目についた。幼い頃に毎年見ていた光景だった。故郷は昔と少しも変わっていなかった。

うだるような暑さだった。畑の脇にはもぐらの死骸が転がっていた。雀の死骸もちらほら見かけた。道路では牛蛙が車に轢かれて潰れており、小川の岸には腐敗した猫の死骸があった。

どこもかしこも死だらけだった。男はふいに立ち止まると、踵を返して駅に戻っていった。

8 回廊

男は職場のエレベーター一回りの廊下をぐるりと一周すると、自分の歩幅でちょうど百歩であることを発見した。刺激に乏しい日々の業務の中で、この発見は大きな喜びをもたらした。

その日以来、男はちょっとした隙間時間を見つけると、いそいそ席を立ってエレベーター一回りを歩きに行くようになった。ただ歩くためだけに、業務を中断して離席することもあった。

いち、に、さん、し。男は歩きながら頭の中で唱えるように数えた。一周して百まで数えると、仕事では感じたことのないような充足感を得るのだった。

まもなく、あのいつも廊下をぐるぐる歩き回っているやつは誰だと噂がたちはじめた。男は、他の社員たちから不躰な視線を向けられるようになった。ある女性社員など、男とすれ違うときにまるで汚物を避けるように遠巻きにした。

男はあっという間に居場所を失い、仕事をやめざるをえなくなった。最後の出勤日、男は廊下を続けざまに三周して三百まで数えた。気持ちは満ち足りていた。

9 撮影

知り合いの知り合いから映画を撮影するので部屋を貸してほしいと頼まれた。男は気乗りしなかったが、交渉にきた助監督を名乗る男に何度も頭を下げられて断りきれなかった。助監督は現状復帰を約束し、連絡先を教えてくれた。撮影が済んだら向こうから電話をくれる手筈となった。それほど時間はかからないということだった。

男は駅前をほっつき歩いて時間を潰した。することなどなかった。商店街の目立たない場所に座り込み、通りかかる人を観察して過ごした。

電話はなかなか鳴らなかった。半日が過ぎたあと、男はしびれを切らして自分から電話をかけた。助監督は交渉のときとはうって変わった横柄な態度で、まだ何か残っていると苛立たしげに言った。いつ終わるか訊こうとすると、助監督は「こっちからかけるって言ってるだろ」ときつい口調で遮り、一方的に電話を切った。

乱暴な言い方に傷ついた男は、心を落ち着けようとして隣駅まで歩いた。そして、駅の北側と南側をくまなく歩き回ったあと、再び最寄り駅に引き返していった。

助監督からようやく連絡があったのは、男がファミレスで四杯目の紅茶を淹れているときのことだった。深夜一時を過ぎていた。あわてて帰ってみると、部屋はまるで物盗りにでも遭ったような様相を呈していた。家具は倒され、そこらじゅうに物が散らばっていた。床や壁には黒くてねとついた正体不明の液体が撒き散らされていた。窓はひび割れ、天井灯はなくなっていた。現状復帰の約束などまるきり無視されていた。

男は怒りに任せて助監督に電話をかけた。何度かけ直しても通じなかった。男はこの部屋で一体どんな映画が撮影されたのか推測してみようとした。まったくの無駄だった。

10 橋の上から

男が橋の上から景色を眺めていると、下流で誰かが溺れているのを見つけた。男のいるところからは少し距離があった。橋は飛び込むには高すぎたし、岸に回り込むには時間がかかりすぎた。

今から通報していたのでは間に合わないことは確実だったが、男は泳ぎが得意なわけでもなかった。誰かに知らせようと周囲を見回したが、人の姿はどこにも見当たらなかった。

そのとき、男は溺れている人もまた橋の上の自分の存在に気がついたということに気がついた。相手はまさに藁をも掴むようにして必死で助けを求めてきていた。

男は恥ずかしいような情けないような気持ちになった。してやれることは何もなかったのだ。

そのことを分かってもらおうとして、男は肩をわずかにすくめてみせた。それくらいでは伝わらないようだった。今度は頭の上で手を交差させて大きく×印を作ろうとした。しかし、追い討ちをかけるだけのような気がしてためらわれた。

男は、橋の上で身動きが取れないまま、溺れている人が水面に沈むまでの一部始終をただ眺めているより他なかった。たっぷり三分もかかったように思えた。急いで岸に回り込んでいたら間に合ったかもしれないと思ったが、もはや手遅れだった。